
時と想いを超えて ~ ヒカルとティナの冒険記 ~

ホープ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時と想いを超えて　～ヒカルとティナの冒険記～

【Nコード】

N8916Z

【作者名】

ホープ

【あらすじ】

ここはポケモンだけが住む世界。多くのポケモンが探検隊を結成して、人助けならぬポケ助けや、未開の地の搜索などをして、日々充実した日々を送っていた。

もちろん、イーブイのティナも探検隊にとっても憧れているのだが、なかなか後一步が踏み出せないでいた。

そんな中、突如元人間だというヒカルと海岸で出会って――？

【ポケモン不思議のダンジョン空の探検隊のストーリーを尊重しつつ、オリジナルのストーリーも展開されていきます】

プロローグ：嵐の海で

とても激しい嵐の夜。そんな中、この海を割くように進んでいく
僕らの乗っている船。目指すはこの世界で一番大きい大陸だ。

早くしなければ、またあいつが追ってくる。そうなれば振り出し
に戻るのには目に見えているから、今度こそあいつが来る前に終わら
せよう。

少し遠くに大きな影が見えてきた。もう少しだ。もう少しで僕ら
の目指している大陸に到着できる。

そんな、一瞬も気が抜けない中、突然の轟音と迸る閃光が走る。
それを感じたと思った次の瞬間には、まぶた瞼をとて重く感じ、体に力
が入らなくなっていた。

「大丈夫か！？　しつかりしろ！　しつかりするんだ！」

僕の相棒が心配しているのが分かる。でも、今さっき何があった
のか僕には全然分からない。

「何が……？」

「お前に雷が直撃したんだ！　意識を保て！」

僕の相棒に、僕に雷が落ちたと言われても、全く現実味を感じる
ことが出来ない。事実を把握できない。そもそも、何で僕は嵐の日
に海の真ん中にいるの？

「無理するな。まずはお前の安全が第一だ」

この声が誰だか分からない。とても頼りにしていた声だとは思うけど、それが誰なのかが全く分からない。思い出そうとすると頭が痛くなる。

「うおっ!？」

今にも二つに裂けてしまいそうな、海を二つに割いて進んでいた船が、音を立ててバラバラに碎ける。誰だか分からないような煩わしい声は破片に乗ってどこかへ流れていき、僕は海の中に放り出された。

必死に僕の名前を呼ぶ誰かの声は耳に残る事もなく、ただこの大波と同じように流されていく。それを叫んでいるポケモンも一緒に。

途中に感じた妙な違和感を最後に、僕の意識は完全に、消えた。

第一話：流れ着く光

「またダメ、なのかなあ……」

目の前のピンクのポケモンをモチーフにした建物——プクリンのギルドはとてもフレンドリーに笑っている。だけれど、私はそれに恐怖心しか抱いて無い。

だってだって、中がどうなってるか分からないんだよ？ 修業はとても厳しいって聞くし、もしかしたら間違えられて襲われちゃうかもしれないし……。

自分の中でもそれはあり得ないと否定する声が聞こえる。でも、それでもこの建物は怖い。

「ううん。今日こそは勇気を出さなきゃ。早くしないと日が暮れちゃうもん」

覚悟を置いて……あれ？ 覚悟を決めてっていうんだっけ。どっちでもいいかな。

とにかく、がっしりとしてまっている鉄格子を開けてもらおうと入口の方まで、一歩一歩踏みしめて歩く。いつもは歩き出す事も出来ずに帰ってしまうけど、今日はなんだかほんの少しの勇気が持てた。

足場が網目模様になっている所に差し掛かると、自分の下の部分から声が聞こえ——！

「ポケモン発見ポケモン発見！」

「わあっ！」

その声を聞いて、おもわず後ろに飛び退いちゃった。あう、やっぱり私には無理なのかな……？

「誰の足形？ 誰の足形？」

「足形はイーブイ！ 足形はイーブイ！」

私の種族名が出ると、顔から火が噴き出るかのように緊張してしまつて、もう私は、無我夢中でプクリンのギルドがある小高い丘を駆け下りていた。

——私って、自分の種族名が知らただけでこんなにも怯えちゃう。これじゃあ探検隊なんて夢のまた夢……。

火照った顔が少しずつ、少しだけ冷やされて行く。もう少しでいつもの場所にたどり着ける。それまで頑張つて走り抜けよう。

少し息が上がって来ている。あのギルドから海岸までほんの少しの距離しかないのに。

火照った顔と走り疲れた体を癒すのに、この海岸はとても丁度良い所。静かな波の音と、足のすぐ近くまで来る水が私の体と心を癒してくれている。海を眺めれば、沈みかけの夕陽がまだ少し顔を出していた。

少し落ち着いてきた所で、さっきの事を思い出す。ずっとプクリンのギルドの前で耳を垂らしながらうるちよろしていて、やっと思いで覚悟を決めたのに、ほんの少しビックリした事があっただけでここまで逃げてきてしまったんだっけ。

「はぁ……。私って、どうしてこんなにも弱虫なんだろう」

この、静かな波の音は私を責め立てることもないし、驚かせることもない。昨日の嵐の時の波とは全然違う、優しい波の音だ。

よくよく海岸を見てみると、昨日の嵐のせいで折れた木々などが流れ着いているのが目についた。

「弱虫な私でも、この海岸を綺麗にするくらいなら出来るもん」

一つ、私のすぐ隣にあった小枝を咥え、海岸の端っこにある岩場の所に置いた。ここならあまり目立たないと思う。

一つ、また一つと小枝を拾ううちに、明日こそはきっと頑張れると思えてきた。

理由なんてない。でも、自分の心の中に何かが芽生えてきたと私は思えた。……。ん？ あれはなんだろう。砂の色に紛れてたけど、あれは、ポケモン？

この海岸のちょうど真ん中あたり。海に潮が満ちてきたら沈んでしまいそうな所にそのポケモンはいた。

——助けなくちゃ。

まだ潮が満ちる時間には程遠い。私はそのポケモンを助けたい一心ですぐに近寄っていった。

近寄ってみて分かる。このポケモンは私と同じくらいの年みたい。まだ、私と同じくらい未来に可能性があるポケモン。助けたいと思う気持ちが強くなる。

「ねえ、大丈夫？　ねえねえ！」

必死にこの黄色くて可愛い姿をしたポケモン——ピカチュウの体を揺さぶってみる。反応は、あった。かすかにうめき声が聞こえたの。

「しっかりして！」

酷く体をゆすられて、何事かと思って僕は^{まぶた}瞼を持ちあげた。目の前には可愛い等身大のイーブイが、心配したまなざしでこちらを見つめてきている。……等身大？

「うわぁー！」

しかし、僕が飛び起きたことでそのまなざしが安堵した物に変わる。悪いひと……悪いポケモンじゃないみたい。

「良かったあ。どこが悪い所はない？」

「え、え……？」

イーブイだね？ 僕の目の前にいるのは、正真正銘のイーブイだね？

心配そうなまなざしを向けているから、僕を心配しているのは間違いない。それはとても嬉しい。でも、問題は別の所にある。

何で、ニンゲンの僕がイーブイの言葉を理解できるんだ？

「え、えーっと、ちょっと聞いてもいい？」

「なあに？ 私が答えられる事だったら何でも答えるよ！」

それじゃあ遠慮なく訊ねられる。僕は……。

「僕は、今どんな姿をしているのかな？」

自分でもこんなに頭が回るとは思わなかった。自分がポケモンの言葉が理解できるということは、自分がポケモンになってしまったか、頭がおかしくなってしまったかの二択だ。もしかしたら、このイーブイが天才で、人の言葉が分かるのかもしれないという可能性もあるけど……。

「あはは。どこからどう見ても普通のピカチュウだよ。それがどうかしたの？」

発する言葉が見当たらない。でも、手を見てみればとても黄色く、背中を振り向けば大きな尻尾が。ほっぺたには小さなふくらみがあるのが分かる。

「え、嘘！ ホントにピカチュウになっちゃったの？」

「なっちゃったって……。なんか怪しいね、キミ」

僕も怪しいと思うよ。突然こんなのが現れたら僕もこんなリアクションを取ると思う。

「全然、全く怪しくないよ！ それより、助けてくれてありがとう」

弁解はしたけど、信用してもらえるかは分からない。でも、このイーブイは信用してくれたみたい。目から疑いの色が消える。

「どういたしましてっ！ 私はティナ、キミは？」

感謝されたのがとても嬉しかったみたいだ。体全体、特に尻尾で喜びを表している。

「僕は……ヒカル。信じてもらえないかもしれないけど、元々は人間だったんだ」

僕のその一言がとても衝撃的だったようだ。イーブイ——ティナはちよつと後ろに飛び退く。さっきも少し思ったけど、ティナはリアクションがとても大きい。

「え、ええー！？ でも、今はどこからどう見てもピカチュウだよ、ヒカル」

「そうなんだよ。僕にも何が何だか分からないんだ」

ティナが悩み始めると、辺り一面を波の音だけが包み込む。

どうして、ニンゲンだったって覚えてるんだろう。それ以外の事は思いだそうとすると、頭が痛くなる。

うーん、僕がポケモンになる前、一体何があったんだろう。

思い出せない。記憶をしまっているタンスの鍵がそのタンスの中に入っている、そんな感じた。一つのことか思い出せば全てが思い出せそうなのに、その鍵が見つからない。

この話を切り上げよう。そう思ってティナと向き直したとき、ティナがどこか遠くを眺めているのに気がついた。僕もそっちの方を見ていると、そこにはあまり良い雰囲気とは言えない、三匹のポケモンがいた。

「ヒカルヒカル。あれってかなり危ない状況だよ！ 早く助けないと……」

ティナの言うとおり、一匹の青い、まん丸としたポケモンと、二匹の空を飛んでいるいかにも柄が悪そうなポケモンが向かい合い、対峙しているところだった。

「リルはどこにいるの？ 君達がどこかに連れてったって聞いたけど」

水色のポケモンはリルをと呼ばれるポケモンを探しているみたい。

「あの小さい水色のポケモン？ その洞窟の中においてきちゃったなあ。ハハ、困ったよ、ドガース君」

「そうだなあ、俺達も疲れちゃって、もう洞窟になんか入れないぜ」

それに対し柄の悪い二匹のポケモン——片方はドガースというらしい奴らは、詫びる様子もなく、水色のポケモンをおちよくつていた。

その二匹の言葉に絶句した水色のポケモンは、ショックで目に涙をためている。——あいつら、あんなにひどい事を平然と言うなんて、絶対に許せない。

「俺達は帰るけど、一匹でも行けると思っんなら行けばいいじゃないか。すぐそこの洞窟だよ」

最後まで、詫びるところか水色のポケモンをおちよくり倒していた。それにはティナも堪え切れない様子だったけど、まずはあのポケモンを助けるのが先決。ティナが喧嘩を吹っ掛ける前に僕は水色のポケモンの方に近寄って行った。

「ねえ、リルってポケモンを探してるの？ 僕達に出来る事があるなら手伝うよ？」

そのポケモンはまだ涙を目に溜めているだけだったけど、今にも泣き出しそうな勢いだ。

「え……？ ホント、ですか？」

「もちろん！ 私もヒカルも、困っているポケモンを見捨てるなんて出来ないもの」

ティナも怒りを抑えてこちらに来てくれたみたいだ。しかも、僕の事をもう友達のように扱ってくれている。

「ありがとうございます！」

涙を拭う仕草をすることもなく、僕達にお礼を述べてくれた。少し、彼の顔に笑顔が戻ってくる。

「ボクはマリルのリオと言います。実は、リルはボクの弟で、ボクがちよっと目を離れた隙に……あいつらに……連れて行かれて……しまつて……」

だんだんと言葉の齒切れが悪くなり、今にも泣き出しそうなそんな雰囲気醸し出していた。きつと、とても弟思いのポケモンなんだろう。

「そこまでいいよ。それ以上話すのは、辛いでしょ？ 私達が洞窟にいるリル君を助けてくるから、それまで待っていてくれるかな」

リオの頷きを見ると、ティナは笑顔でそれを返し、足早に海岸の横にそびえたつ横穴に向かっていく。無論、僕もそれを追う。

入口の前では、洞窟内から零れ出る湿気をかすかに感じ取ることが出来た。きつと、中は海水がしみ込んでいるのだと思う。

いざ中へとティナが進むのかと思ったら、洞窟の前で恐れをなしたように震えていた。

「ティナ、大丈夫？」

「あつ、……うん、大丈夫！ それじゃ、リル君を助けに行こう！」

まだ震えている前足を必死に動かしながら、洞窟の中へ進んでいく。きつと、ティナも怖いんだろう。僕もちょっとだけ、怖い。

恐怖で塗り潰されそうな少しの勇気を振り絞って、僕もティナも、洞窟へ踏み入る一步を踏み出す。ただ、リル君を助けたいという思いだけを胸に。

第一話：流れ着く光（後書き）

サブタイトルの流れ着く光からも分かるように、ヒカルの名前は漢字で書くと光になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8916z/>

時と想いを超えて ~ヒカルとティナの冒険記~

2011年12月29日00時55分発行